

## 猿樂伝記

作者不詳。享保年中（一七一一六年～一七三六年か？

「燕石十種」所収の「猿樂伝記」より。

○翁渡しの根元は日本開闢の時日の御神天の岩戸に隠れ玉ふを以八百萬神是を歎き岩戸の前にて舞曲を調へ是を慰め給ひしを學びたる物にして能の惣嚙子方には八百萬の神達を移たる故也シテの翁を天照太神宮に表し色黒き尉を住吉の神に表し脇師を戸隠の神に表す

一書には翁は天照太神千歳は八幡太神（鈴の太夫）三番叟は春日明神と稱す諷ものは陀羅尼に神道の詞を雜へたるなり是何者の作かしらず

翁と尉は今式三番に舞ふ處にて脇師の事は式三番過本に能に及て其業を勤む天の岩戸開け初たる處を學びて是開口也其心持傳授あり故に脇師は脇能に至りて勤るを以其代りの心にて千歳といふものを面箱翁の初發の吟聲過て假りに立て舞ふ是岩戸の前にて戸隠手力雄神諸神に抽て其功有處を

表する也上代は翁とシテ三人同様に立一同に舞たり是一人は正神の神翁也又一人は千々の尉と唱へ今一人は延命冠者と唱ふ此兩翁をば神の父とし神の子として子孫相續し萬代繁昌を含む也此三人の翁を用る時は一翁に面箱持一人宛別々に立て三翁一同吟一同舞する故に千歳にも三人一同に業を同じうすかゝる譯にて金春が家を始下懸りにて面箱持千歳を勤る是古法也上懸りにては別にしてツレを以千歳を立る後世の了簡也翁千歳の役畢て色黒き尉の面なしに立て業あり此段過て風流の所作あり色黒き尉は狂言師より勤るを以是に添たる流なれば風流餅イカゞの風流等あり風流畢て鈴の段此時黒き面を掛る是式三番に白色、黒色、肉色と天地人の色を表す、白は天黒は地肉は人也其肉色は面なしにて勤る處也是残らず畢る翁を始め總役人樂屋に入中古は翁一人にて勤るにより囃子方は舞臺に残り止り直に脇能を勤る古來は脇能にて囃子方別に出たり其式三番の内より脇能の脇師大臣裝束にて鏡の間の眞中に床几に掛り居る處、翁揚幕の内へ入て懷中より祈禱呪文の守りを取り出し其脇師へ渡す脇師是を拜受して懷中し梯懸りへ此時脇師心中に呪文あり千歳の

業を繼ぐ心持也是手力雄の神を表する處也是が開口の場也  
然るを開口脇と呼て新規の作文を正面に向て吟じ是に繼で  
其脇能の名乗を云是は目出度其節を賀する事にして一ツの  
法也全體脇能の脇として出て勤る處を開闢の開口の地なり  
其作文なきをば開口とはいはず今常體是也小鼓ばかりにて  
出て正面に向て拜禮す是を禮脇といふ其小鼓を置鼓といふ  
尤笛のあしらひあり開口と云時鼓なく笛ばかりにて出て千  
歳の高音といふを吹時作文に繼て脇能の名乗をなのり其跡  
にて次第をうたひ續て道行をうたふ

○翁の烏帽子は（以下略）

註 「燕石十種」は国立国会図書館デジタルコレクション

ンに「燕石十種・第1」(DOI 10.11501/991268)

として画像有り。49コマ目。

4 [猿楽傳記, 富山市図山田孝雄, DIG-TYMY-426, 写, 1冊, 100257349](#)

M image